

平成 22 年 6 月 7 日現在

研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19720005
 研究課題名(和文)カント批判哲学における「ミスティシズム」概念の形成をめぐる哲学的・人間学的研究
 研究課題名(英文) Ahistorical and anthropological study of the formation of the concept of “Mysticism(us)” in Kant’s Critical Philosophy
 研究代表者
 山根 雄一郎 (YAMANE YUICHIRO)
 大東文化大学・法学部・教授
 研究者番号：50338612

研究成果の概要(和文)：

神秘主義的思考に批判的に対峙することは、現代において依然、重要な課題である。18世紀啓蒙期に展開されたカントの批判哲学を、その先駆的な営みとして読むことができる。通常「神秘主義」と邦訳されるドイツ語の語形にはヴァリエーションがあり、それをカントは批判哲学の根本洞察に通底する仕方で周到に使い分けている。その消息と、それに纏わる幾つかの問題を、カントの「人間学講義」筆記録や同時代ヨーロッパの状況をも参照しながら考察した。

研究成果の概要(英文)：

It is still an actual theme for us to examine the mystical way of thinking from a critical viewpoint. Kant’s Critical Philosophy developed at the age of the Enlightenment can be seen as a prototype of such a program. Concerning so-called mystical matters, the German language has two similar words, i.e. “Mystik” and “Mysticism”. It seems that, in his critical period, Kant carefully makes a distinction between them, which probably reflects the principal thesis of his Critical Philosophy. In this study I tried not only to clarify what such distinction meant, but also to consider mystical matters involved in Kant’s philosophical thought and life, referring to his lectures of Anthropology and the then situation of ideas in Europe.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,200,000	390,000	2,590,000

研究分野：西洋近世哲学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：カント、批判哲学、神秘主義、思想史

1. 研究開始当初の背景

(1) 2005年に出版した私の博士学位論文『<根源的獲得>の哲学 カント批判哲学への新視角』(第46回財団法人東京大学出

版会刊行助成図書)の成果によれば、カントは、批判哲学における「ア・プリオリ」の概念から、旧来の「生得的」の概念に纏わり付く神秘(主義)的要素を追放することを強

く意識していた。ところで、『広辞苑』(第5版)によれば、「神秘主義 (mysticism) 神・絶対者・存在そのものなど究極の実在になんらかの仕方では統一融合できるという哲学・宗教上の立場。東洋ではインドのヨーガ、中国の道教・密教、イスラムのスーフィズム、西洋ではプロティノスに始まり、新プラトン学派、エックハルト・ベーメらのドイツ神秘主義、現代ではハイデガーなどが代表的。」とされる。ただし、ここに列挙された古代から近世初頭にかけての思想家ないし思想潮流が、総じて「神秘主義」という言葉で自己規定したわけではない。理由は単純で、こんにち「神秘主義」という日本語に対応づけられる西洋近代諸語(以下ではこれらを一括してミスティシズムと仮名書きする)の成立それ自体が比較的新しいと見られるからである。「神秘主義」(“mysticism”の訳語)という名詞自体が一九世紀の新造語である。「キリスト教神秘家」とされる人々が活動していた時代にはこの語は存在していなかった。」と、この間の事情を説明する論者も見受けられる(鶴岡賀雄「グノーシス主義とキリスト教神秘主義」、63頁(大貫隆・島園進・高橋義人・村上陽一郎(編)『グノーシス 異端と近代』、2001年、所収)。

(2)ところが、『オックスフォード英語辞典 *Oxford English Dictionary*』は、その「ミスティシズム」の項目で1736年と1765年の用例を挙げ、この英単語がすでに18世紀には成立していたことを明示している。のみならず実は、前掲拙著100頁でも言及した通り、カントのドイツ語文献にもこの語は散見される。しかも、カントはこの語を、彼が心術の点で当代のピエティスムス(敬虔主義)の強い影響下にあったとする所伝を額面どおりに受け取る者には意外なことにピエティスムスを批判的に相対化しようとする場面で意識的に、またその結果として批判哲学に固有の立場を逆照射する仕方、用いているとも解釈され得る。このことを私は、「カントと「ミスティシズム」」(大東文化大学紀要人文科学第45号、2007年、所収)において文献学的に詳論した。

(3)以上の通りであるとすれば、従来なされてきたように、「ミスティシズム」概念に対して専らキリスト教ないし宗教学の見地から取り組むだけでは必ずしも十分とはいえない。むしろ、この概念を、カントの批判哲学をひとつの結晶とする近世哲学史の展開の中に、的確に位置づけていく試みこそが求められていると言うべきであろう。

2. 研究の目的

(1)従来、カント哲学における「ミスティシズム」の問題は、研究上の死角に位置してきた。その一因は、語形的に古典ラテン語に遡ると見られる *Mystik* と、カントの同時代語にも等しい *Mystizismus* (異綴あり)との混用の実態を踏まえて両語間にあり得る有意な位相差を見極めようとする解釈上の試みを欠いたまま、両者を最初から同義語と見なす先入主が支配的だった点に求め得る。カントによる *Mystik* の語の用例を博引傍証して分析したハイムゼートにしてその弊を免れていない(H.Heimsoeth: „Kant und Plato“, in: *Kant-Studien*, 1966, S.349-372)。しかもこの弊は現在にまで持ち越されている。2004年に本文篇の完結した『歴史的哲学事典 *Historisches Wörterbuch der Philosophie*』には „*Mystik, mystisch*“ の項目が立てられ、その枠内で「ミスティシズム」への言及が見られるが、ドイツ中世の神秘思想家やクザーヌスや「バロック時代」の思想家における *Mystik* を概観する論述からの展開とは不連続に、「ミスティシズム」という表現が、その直接の源泉に擬せられ得る文献への言及抜きに唐突に導入され、カントにおける „*Mystik und Mysticism*“ といった仕方で両語が無造作に並置される事実、そのことははっきり見て取られる。

(2)さらに、『歴史的哲学事典』の記述は、カントの「ミスティシズム」概念(とされるもの)が、専らドイツ語圏の思想伝統という閉じた系からのみ生み出され得たかのような印象を与えかねないが、こうした概念史的叙述はそれ自身、相対化される必要がある。2009年に逝去された坂部恵氏が繰り返し強調された通り、それは、とりわけ19世紀国民国家形成期に高揚したナショナリズムの、哲学史研究における残滓とも見なされ得るものであり、欧州統合を目の当たりにしつつある現代の研究が無批判に追従すべきものではないからである。教科書の図式にありがちな「ドイツ哲学」の単線的発展という先入主に囚われない仕方、カントの「ミスティシズム」概念のありようを多角的に照射し、批判哲学の現代的なポテンシャルを新たな角度から取り出すための基礎作業を行うこと、これが申請当初における研究目的であった。

3. 研究の方法

(1)本研究は、従来のカント哲学研究においてほぼ等閑に付されてきた(ミスティクとは区別される固有の概念としての)「ミステ

イシズム」概念に本格的に着目する点にまず意義を有する。私は、前掲拙論「カントと「ミステイシズム」」において、カントによる「ミステイシズム」の批判的な内容規定には、17世紀ロマンス語圏カトリックのミステイシズムであるキエティスム(静寂主義)への批判的理解が含みこまれているとも解し得ることをカント文献に即して指摘した。この点を踏まえ、「ミステイシズム」概念を単にドイツ神秘主義以来のドイツ・ローカルの流れの中で見るのではなく、むしろ、ヨーロッパ近世における精神的展開のなかに出自をもつものとして捉え、位置付けて行くべく、カントの同時代の神学や歴史学といった哲学の隣接領域の文献にも目配りするように努めた。

(2) 哲学史研究において、分野横断的・学際的なアプローチはとりわけ近年において進展著しい。ところが、わが国では、既存分野において細分化の進む研究状況をフォローすることがとかく優先されがちな結果、近世哲学史に関して、哲学と神学・歴史学・文献学といった境界領域の研究成果についての図書館の蔵書は、到底十分とは言えない状況にある。各分野の第一次文献については言うまでもない。そのため、18世紀の刊本や研究文献を豊富に所蔵するドイツ語圏の図書館を数次にわたって直接訪問し、資料の調査および収集を行い、研究基盤の整備に努めた。

4. 研究成果

(1) アカデミー版カント全集所収の「人間学」関係テキストの分析から次の成果を得た。

有限理性的存在者たる人間に不可避のミステイシズムを乗り越えた、リアリスティックなカントの平和構想のもつ基本性格の側面を照射した。具体的には、論文「平和の形而上学 『永遠平和のために』の批判哲学的基底」(坂部恵・佐藤康邦(編)『カント哲学のアクチュアリティー 哲学の原点を求めて』所収)の第5節「権利問題」としてのカントの平和構想の論述や、同時代の少壮哲学者トマス・アプトの思想に対するカントの態度をめぐる注記の記述などに、読解の成果を反映させた。ポーランドを後背地とするケーニヒスベルクで思索を紡いだカントが、その教師生活を通じて、危機を迎えていた当代のポーランド情勢に終始関心を払い続けたこと、また、ポーランド・モーメントに注意することで、『人倫の形而上学』の本文がよりいっそう整合的に理解可能になることが、主に1780年代から1790年代に

かけての「人間学講義」筆記録の検討を通じて、具体的に示された。従来、カント哲学におけるポーランド・モーメントについてはほぼ等閑視されてきたが、上の成果は、カントが批判的見地から育んだ「ミステイシズム」概念と、同時代ポーランドに展開した神秘主義思想の一類型であるハシディズムとの連関といった問題設定を新たに可能にするものでもあろう。カントの政治哲学・国家哲学を主題とする国際学会(2010年9月、於ポーランド・ウッチ大学)をドイツとポーランドの研究者が共同で準備しているが、こうした現地の動向をも参照するなら、カントの「人間学講義」におけるポーランド・モーメントを主題化した着想の先駆的かつ今日的な意義は明らかであると言ってよい。

(2) ミステイシズムとミステイクとの語法上の差異化を、カントはその最晩年に弟子ヤッハマンの著書『カント宗教哲学の吟味』のために書き下ろした短文において試みているように思われる。このことを、ヤッハマン著の本文の検討を通じて確認した。(同時代の神秘家の教説とカント哲学との類似を主張した当代の論者ヴィルマンズに対しカントが「好意」的であったとする日本語解説[理想社版『カント全集』第13巻、775頁]は訂正を要する。)「狂信」を批判するカントの念頭には教会史家モスハイムの著作における近世神秘主義運動の描写があったと考えるが、それに関する知見を媒介したとも考えられるシュバルディングの著作における「感情」概念に注目し、神学に軸足を置くシュバルディングの議論の帰趨を見届け、それが、拙著『<根源的獲得>の哲学

カント批判哲学への新視角』において詳論したカントによる批判的な「根源的獲得」論の形成に反作用した可能性を指摘した。

(3) 神秘状態(Zustand)としてのミステイクとは位相的に区別される、それへの類落機能(Funktion)としての理性のミステイシズムと不断に対決することが、カント固有の理性のクリティシズム(批判機能)を駆動していることを指摘して、上記(2)の論点を明確にしつつ、ミステイシズム概念をクリティシズム(批判哲学)の中枢との連関に置き、その現代的意義にも言及した独文論文を、「第11回国際カント学会」に投稿したところ、査読を通過し、受理された。(公示されている査読者名簿にはN・ヒンスケやR・タイズといった当該分野の第一線の研究者が含まれる。一般発表の応募倍率は約2倍であった。)学会最終日における口頭報告(司会はジェノヴァ大学F・カメラ教授)の後、参会者から「ド

イツ語によるカント研究の大きな成果」とする評価が寄せられた。本論文は学会論集の枠内で公刊されることになっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

Yuichiro Yamane, „Mystik, Mystizismus und Kritizismus bei Kant“, in: „Kant und die Philosophie in weltbuergerlicher Absicht. Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses“, hrsg. v. Claudio La Rocca et al., in. Ersch. 掲載の前提となる学会発表応募時に査読有。

[学会発表](計4件)

Yuichiro Yamane, „Mystik, Mystizismus und Kritizismus bei Kant“, 第11回国際カント学会、2010年5月26日(2009年9月投稿、2010年1月13日受理通知)、於ピサ会議会館(イタリア共和国ピサ市)。

山根雄一郎「「もうひとつの革命」への視線」日本カント協会第34回学会、2009年11月21日、於立正大学大崎校舎。

山根雄一郎「カントと神秘主義をめぐって」三田哲学会 哲学・倫理学部会例会(MIPS 2009) 依頼講演、2009年10月31日、於慶應義塾大学三田キャンパス。

山根雄一郎「「神秘主義 Mystizismus」拾遺」日本カント協会第33回学会、2008年11月15日、於九州大学箱崎キャンパス。

[図書](計1件)

坂部恵・佐藤康邦(編)、ナカニシヤ出版『カント哲学のアクチュアリティー 哲学の原点を求めて』2008年、179-212頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山根 雄一郎(YAMANE YUICHIRO)
大東文化大学・法学部・教授
研究者番号：50338612